

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## <書評と紹介> 村上直著 『江戸近郊農村と地方巧者』

著者	中根 賢
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	62
ページ	110-112
発行年	2004-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10820">http://hdl.handle.net/10114/10820</a>

## 〔書評と紹介〕

村上 直著

## 『江戸近郊農村と地方巧者』

中根 賢

本書は、天領や代官の研究で知られる著者が近世の川崎地域について長年の研究をまとめたものである。著者は神奈川県川崎市に四六年間にわたって在住し、その間、市の文化財審議会委員や市史編纂委員を務めながら、地域の歴史や文化財の調査に深く携わってきた。その実証的かつ多面的な研究活動から、近世の川崎地域についても多くの研究論文が発表されている。本書はそうした数々の論考を編集した労作である。

本書の主旨は「巨大都市江戸の発展を支えたのは近郊農村である」との視点に立ち、自律的に村や地域を支えた人々、とくに「地方巧者の活躍がきわめて大きいことに注目」するということである。そこで本書では江戸近郊農村の例として江戸南西部、多摩川中下流域を設定し、近世の各時期に様々な場面で手腕をふるった地方巧者に光を当てている。本書の構成は次の通りである。

はじめに

## I 徳川家康の関東入部と代官頭

## 一 小田原合戦と豊臣秀吉の「禁制」

## 二 徳川家康の江戸「打入り」

## 三 奉行人（代官頭）の連署奉書

## 四 小杉陣屋と小杉御殿

## 五 天領から旗本領へ

## 六 増上寺領の成立と展開

## II 近郊農村と地方巧者

## 一 近郊農村の検地と代官頭

## 二 小泉次大夫と稲毛・川崎二か領用水

## 三 赤穂浪士の滞在と近郊農村

## 四 地方巧者田中休愚

## 五 新田の造成と代官

## 六 近郊農村の塩業

## 七 大田南畝の多摩川巡視

## 八 江戸地廻り経済と在郷町

## III 東海道と川崎宿

## 一 東海道宿駅の成立と伝馬役

## 二 伝馬百匹常備

## 三 六郷の渡し

## 四 宿の困窮と田中休愚の改革

あとがき

次に本書の概要を紹介しよう。

I は近世前期の領域支配についてあらゆる角度から論じている。一では川崎市麻生区の旧家に残る秀吉の「禁制」をもとに、広域的な視点から歴史的背景を考証する。二では家康の関東入部

後、小田原を中心とする支配体制を江戸中心に改めていく政策が述べられる。三では川崎市中原区の神社に残る、徳川氏奉行人（代官頭）の連署奉書の歴史的意義を検討する。四では中原往還の多摩川渡河地点に設けられた小杉陣屋と小杉御殿について、陣屋の民政と將軍家御殿の機能が紹介される。五では寛永の地方直しと並行して天領が旗本領に移り変わった例を網羅する。六では將軍や夫人の物故者がある度に菩提寺の一つ、増上寺に御霊屋料として寺領が寄進され、寺領となった村々の様相が示される。

Ⅱは地方巧者の活躍と近郊農村ならではの内容が盛り込まれている。一では武蔵国の橘樹・都筑両郡で、代官頭による検地が進行したことを述べる。二では家康の家臣で地方巧者の小泉次大夫吉次が多摩川から用水路を開削し、稲毛・川崎の二か領に引水した事業を明らかにする。三では川崎市幸区にかつて赤穂浪士の隠れ家があり、江戸の吉良上野介義央を遠くから狙っていたことが紹介される。四では東海道川崎宿の名主、田中休愚喜古が地方巧者となるまでの経緯を考察する。五では大師河原村（川崎市川崎区）名主、池上太郎左衛門幸豊が海辺の新田開発に取り組み、いわゆる池上新田を経営するにいたった過程をたどる。六では江戸湾を望む村々で塩業がおこなわれ、なかでも大師河原村の製塩については史料を列挙して検討されている。七では幕臣、大田直次郎（南畝）の「調布日記」をもとに、勘定所の役人として多摩川の下流から上流を巡視した出張先での見聞をまとめる。八では大山街道の在郷町、溝口（川崎市高津区）を例に、江戸地廻り経済圏の拠点であったことを取り上げる。

Ⅲは近世前期から中期までの東海道川崎宿について概観している。一では伝馬証文から川崎宿の成立を追い、二では同宿に伝馬百匹が常備された時期を検証する。三では春から秋にかけて運航された渡船が幕府から地域に移管されてのち、どのように運営されたかをうかがう。四では正徳期の駅制改革と田中休愚の宿復興策との関係を説明する。

以上が本書の概要である。このなかで特に興味深かったのは「赤穂浪士の滞在と近郊農村」である。赤穂浪士に隠れ家を提供したのは下平間村（川崎市幸区）の年寄輕部五兵衛であった。一見、播磨赤穂藩とは何の関係もなさそうだが、五兵衛は江戸の赤穂藩上屋敷の下掃除を請け負い、代わりに秣を納めていた。こうした縁で堀部弥兵衛、大高源吉、富森助右衛門らと親しい関係にあり、浅野家改易後も進んで浪士の面倒を見たというのである。本書のテーマである、江戸と近郊農村との関係がよくわかる例である。また小泉次大夫、田中休愚、池上太郎左衛門といった、地方巧者の人物像を、史料に即してありありと浮かびあがらせるあたりは著者の独壇場といえよう。

しかしあえて欲をいえば、対象地域を主として川崎市域に限定せず、対岸の東京都側も加え、多摩川両岸地域として捉えた方がよかったと思う。江戸地廻り経済圏をはじめ、塩業も渡船も多摩川を境に断絶するわけではなく、むしろ対岸の諸村と密接な関連があるだろう。多摩川両岸を比較しつつ関連付けて述べれば、江戸西南部での近郊農村の特色により厚みが増したと感じる。

とはいえ本書は地域史を考える上で余りある価値がある。歴史

研究者はもちろん、川崎市域の近世に興味を持つ方や、さらには地域史の捉え方に行き詰まりを感じている方にも、本書は大いに示唆を与えてくれるにちがいない。まずは一読をお勧めする。

〔二〇〇四年一月刊 A 5 判 二三五頁 三二〇〇円＋税 大河書房〕